応用から基礎、化学から生物学へ
～自らの興味を追い求め続けた高専生の一例～

From Applied Science to Fundamental Science, Chemistry to Biology: an Example of A Kosen (Institute of Technology) Graduate Who Is Pursuing Own Fascination

°西村 亮祐（東北大院生命）

°Ryosuke Nishimura (Tohoku Univ.)

E-mail: nishi@biology.tohoku.ac.jp

講演概要

講演者は、工業系の高等専門学校（高専）を卒業したのち、大学理学部へ編入学し、さらに大学院へと進学して、現在はアカデミック（大学・国公立研究機関等）の研究現場で活躍する研究者を志している。高専から大学への進学の際に、応用科学である化学工学から、基礎科学である生物学へと転向している。本講演では、理系における多様なキャリアパスの一例を紹介し、専攻を変える（＝複数のバックグラウンドを持つ）ことのメリットと、中長期的な視点を持つことの重要性を訴えることを目的として、講演者がこれまで歩んできた道のりとこれからの将来の展望について、自身の実体験を基に語る。

講演内容

1） はじめに

簡単な自己紹介とともに、講演者のバックグラウンドについて説明する。

2） 現在の立場に至るまでのプロセス

講演者の現在の立場に至るまでのプロセスを、高専入学の経緯から現在の研究内容まで時系列を追って紹介していく。特に、専攻の転向を決意したきっかけと、大学（学部）編入学後から現在まで活動を続けている、生化学若い研究者の会[1] における取り組みに力点を置いて説明する。また、高専での卒業研究と大学編入学試験、現在の研究内容についても紹介する。

3） 将来の展望

講演者の将来の展望について説明する。講演者は翌年（2017 年）春に博士前期課程を修了し、研究室を変えて他大学の博士後期課程へと進学する予定である。学位取得後は、海外でのポスドク経験ののち、帰国して国内のアカデミックポストを得ることを目標としている。これらのモチベーションとなっている要因について話したい。

4） 最後に：聴衆へ向けたメッセージ

専攻を変え、視野を拡げることの有用性を強調したい。また、実現したい夢や目標によらず、できるだけ早い段階から先を見通して動くことの重要さも訴えたい。

参考文献

[1] 生化学若い研究者の会 HP　http://www.seikawakate.org

© 2016年 応用物理学会